



Changes in conjunctival-scleral thickness after strabismus surgery measured with anterior segment optical coherence tomography

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2019-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 寛子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00003539

論文審査の結果の要旨

斜視手術は、外眼筋を付着部より後転させたり、前転させたりすることで、筋の弱化または強化をはかり、眼位を矯正する手術である。斜視手術の目的は先天性では両眼視の獲得と整容的な改善、後天性では両眼視の改善、複視の消失、整容的な改善である。しかし、斜視手術には問題点もあり、術後長期間眼位の変動があり、再手術が必要になることがある。そして再手術の際には過去にどちらの眼に対して、どの筋の手術を受けたかが不明なことがある。手術歴が不明な場合、過去の写真を持参してもらったり、細隙灯顕微鏡で結膜癒痕を観察したりすることで、以前の手術内容がわかる場合がある。斜視手術も現在は小切開が用いられるようになっており、癒痕を見逃す可能性がある。その他、CT や MRI、超音波生体顕微鏡を用いて過去の手術を予測する方法もある。しかし、CT は被爆すること、MRI は時間と費用がかかること、またこの2つは眼球全体を把握することはできるが、眼球の細部にあたる付着部の位置などについて把握することはできない。超音波生体顕微鏡は、付着部の位置はわかるが、測定するにはアイカップを装着する必要がある、時間も手間もかかる。簡便で非侵襲的に評価できる方法はないかということで、前眼部光干渉断層計（以下前眼部 OCT）が注目されている。外直筋後転群、内直筋後転群、内直筋前転群、外直筋前転群の4群に分類し、術前および術後4か月時に前眼部 OCT を用いて眼球壁を撮影し、結膜から強膜までの厚さを計測した。Limbus、insertion、tendon の3か所を定義し、術前後で統計解析を行った。外直筋後転群では insertion と tendon で術後に有意に薄くなり、内直筋後転群では tendon で術後に有意に薄くなった。内直筋前転群では、insertion と tendon で術後に有意に厚くなり、外直筋前転群では limbus、insertion、tendon のすべてで術後に有意に厚くなった。斜視手術によって、結膜から強膜までの厚さは前転術と後転術で異なる変化を示した。前眼部 OCT による眼球壁の撮影は、手術歴不明な症例に対して、過去の手術を推測する上で役立つ可能性がある。

以上により、本論文は博士（医学）の学位の授与にふさわしいと審査員全員一致で評価した。

論文審査担当者

主査 松山 幸弘

副査 岩下 寿秀

副査 峯田 周幸